

緑内障に対する流出路再建術

緑内障の視野障害の進行を止めたり遅らせたりする為には、眼圧を下降させることが最も有効です。しかし、目標となる眼圧レベルは一人ひとりで違い、視神経や視野が悪いほど眼圧を下げる必要があります。あなたの眼圧を下げる為に薬物治療等を行ってきましたが、今の緑内障の病状から考えると現在の眼圧ではまだ高いと考えられ、手術によって更に眼圧を下げる必要があります。

今回行う手術は「流出路再建術」という術式です。この手術は眼圧下降が期待され、合併症も少ない手術ですが、頻度は低いもののいくつかの合併症や若干の問題が生じることがあります。眼圧の値を含めて術後の経過や対処方法と起こりうる主な合併症を説明します。

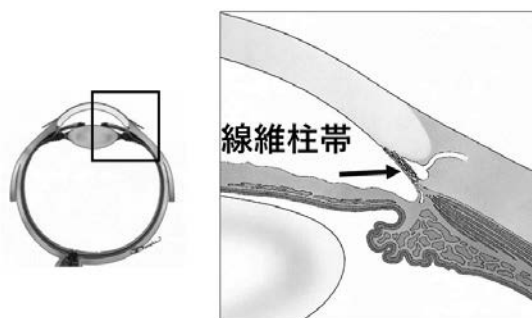
1. 手術の目的

視神経は一旦障害を受けると回復しない為、手術を行ってもこれまで失われた視力や視野を元に戻すことは不可能です。手術は視神経の負担となっている眼圧を下げて、視野障害の進行を遅らせたり止めたりするために行います。眼圧が下がっても視野障害が進行する方もいます。これは、緑内障では視神経が障害されてから視野障害が出現するまで数年間もかかる為、もともとあって視野には出ていなかった視神経障害が術後に現れる、あるいは老化による視神経の減少が原因であるとも考えられています。手術の効果が緑内障の進行予防に100%ではないことをご理解下さい。

2. 手術の方法眼圧は眼内を循環している房水と呼ばれる水分の量で決定されています。房水は目の中で一定の割合で生産されていて、一定の割合で線維柱帯を通して眼外に流出しています。

「流出路再建術」は房水の流出抵抗が上がった線維柱帯を切開することで、流出抵抗を弱めて眼圧下降を得る手術です。眼内に専用の器具を挿入して、糸やフックで線維柱帯を切開します。

線維柱帯を切開する方法としては、眼内法と眼外法があります。目の状態によって適切な方法を選択します。



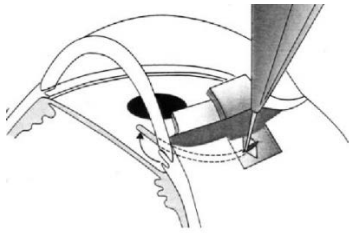
1) 眼内法

小さな切開から、眼内に器具を挿入することにより線維柱帯を切開します。



2) 眼外法

結膜と強膜を切開して、眼外から器具を挿入することにより線維柱帯を切開します。



3. 麻酔について

手術は原則として局所麻酔で行います。非常に稀に麻酔薬に対してショック(強いアレルギー反応)を起こす可能性があります。万一ショックが起きた場合は適切な処置を行います。また、麻酔の際に眼球の後ろに出血(球後出血)を起こすことがあります。球後出血が起きた場合は手術を中止し、2日~1週間ほどの間をあけて再度手術を行います。ほとんどの場合、球後出血は一過性で視力に影響しませんが、極まれに重篤な視力障害の原因となることがあります。

4. 合併症について

1) 前房出血

線維柱帯を切開した時に眼内(前房内)に出血します。ほとんどは数日で吸収されます。出血が多い場合は、洗浄して出血を除去することがあります。

2) 眼圧上昇

前房出血に伴い、眼圧が上昇することがあります。点眼、内服、出血洗浄で治療します。また手術の効果が足りないために、緑内障によって眼圧が下がらないことがあります。この場合は再手術をすることがあります。

3) 低眼圧

眼圧が下がり過ぎてしまう状態です。低眼圧が続くと眼球の張りが失われて、視力が低下したり、物が歪んで見えたりすることがあります。低眼圧の原因は、排水が過剰

なことや白目から房水が漏れることが主です。排水が過剰な場合には、眼内に粘弾性物質を注入したり再手術を行います。

4) 角膜障害

線維柱帯を切開する際に、角膜に損傷（デスメ膜剥離）を起こすことがあります。ほとんどは視力に影響しませんが、極まれに再手術が必要なことがあります。

5) 駆逐性出血

術中または術後の低眼圧によって、眼内に大量に出血（駆逐性出血）をおこすことがあります。これが起こると視力を失う場合もあり再手術が必要となります。発症する確率は極めて稀です。

6) 白内障の進行

白内障は水晶体が混濁する疾患ですが、この手術によって進行が早くなる方がいます。高齢者やもともと白内障のある方に多いことが知られています。白内障が進行すると視力が低下し、白内障の手術が必要となることがあります。

7) 中心視野の消失

稀に術後に中心部の視野が失われて視力が著しく低下する場合があります。視野が極度に悪い方での危険率が高いといわれています。手術による急激な眼圧降下に視神経が耐えられないため、あるいは視神経が障害を受けてから視野障害が出現するまで数年かかるために、もともと弱っていた視神経障害が術後に現れるためと考えられています。

8) 術後眼内炎

術後眼内炎は、傷創からバイ菌が入り眼に化膿性炎症が起こる重篤な疾患です。これを放置しますと眼内が膿んで失明します。抗菌剤を集中的に点滴したり、眼内を抗菌剤で洗浄したりしますが、発生頻度は1000例に1例程度の稀なものです。